

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 大熊狸喜

挿絵 さくや朔日



登場人物紹介

Characters



たきがわ

滝川ハルカ

白百合乃杜学園の三年生、バレー部キャプテン。元気で活発、ボーイッシュな性格。

あさみや みつき

朝宮美月

私立白百合乃杜学園に通う三年生、学園の生徒会長。眼鏡が似合う知的な少女、少し近寄りたいたい存在感。



てんじょうゆうき
天上 優希

隼人のクラス担任。超フェロモン系の美人
女教師。



かすみばやしきくらこ
霞林 桜子

白百合乃杜学園の二年生、茶道部
部長。優雅で物静かな立ち居振
舞い。

すすめさきはやと
進崎 隼人

白百合乃杜学園唯一の男子生徒、一年
生。

プロローグ 新人生と春の嵐

第一章 ファーストキスが四連続!?

第二章 掌とおっぱいとお尻と、嫉妬する舌

第三章 肉欲と二つのお祝いと、素直なエッチ

第四章 濡れる女たちと濡らされる子犬

第五章 部屋の子犬と四人のワルツ

エピローグ 隼人の決断と三百人の決断

第二章 掌とおっぱいとお尻と、嫉妬する舌

「進崎くん、ちょっといらっしやい」

翌朝、隼人は教室に入るよりも前に天上先生に捕まった。昨日と同じく真面目そうな顔をして生徒相談室に入室する担任美人教師。

(な、何だろ……今日はまだ叱られるようなこと、何もしてない筈だけど……)

不安に駆られる男子生徒を相談室に招き入れると、女教師はドアを閉じてカチャリッと鍵を掛ける。そして振り返ってニッコリと流し目で微笑み、髪を掻き上げるように両腕を後頭部に回すと、身体をくねらせながらゆっくりと少年に迫ってきた。

「うふふ、先生ね……進崎くんのこと、もっと知りたくなっちゃった」

「僕のことって、いったい……？」

何かを企む熱っぽい目をした担任教師は子犬のような男子生徒を壁際に追い詰めると、起伏に恵まれた身体を密着させてくる。そのまま壁と女体で少年をサンドイッチにして、スラックス前部を女の柔掌でスリスリとさすり始めた。

「わふっ!? せ、先生っ……な、何をっ!?」

「ふふ……だからね、キミのイロイロを知りたくなっちゃったの。例えばこんなところと

か……♥」

スリ、スリスリ。

「——っ！ せつ、先生……っ！」

服の上からとはいえ、局部を女性に触られるなんて初めてのことである。緊張と驚きで少年はヤモリのように壁に張り付いてしまった。

軽く胸を押さえられて、美しく楽しげな瞳で間近から顔を覗き込まれる。柔爆乳を圧着される胸部に、暖かく柔らかくポヨポニと弾む感触。香水なのだろうか、目の前の爆乳谷間からは甘くていい香りが漂ってきて、鼻腔を擽られる。

ズボンの上から柔らかい掌でペニスをなぞられさすられると、暖かい圧力受ける若ペニスはムクムクと血を集め始めてしまう。スラックスの中では外からの刺激に興奮した少年肉角が、己を隠す布を突き破らんばかりに硬化直立していた。

「苦しそうねえ、楽にしてあげなくちゃ……ルンルン☆」

「わっ、あの、それは——っ!!」

極度の緊張で身体が硬直している少年は言葉だけで必死に抵抗するものの、女教師にされるがままにベルトを緩められる。ズボンを下げられトランクスも下げられると、隼人のペニスは生徒相談室の中で剥き出しにされてしまった。

「わあ……すご〜い☆」

「~~~~~!!」

生まれて初めて、女の人にペニスを見られた。しかも年上の担任女教師に、間近でじっくりと見られている。恥ずかしすぎて、全身に汗を吹いてしまう。

勃起した隼人のペニスは、少女みたいな外見からは想像も出来ない程、太くて長くてゴツゴツしていた。赤ちゃんの手首ほどの太さを持った肉棒本体は細い血管にビッシリと覆われていて、所々で凹凸が艶を浮かせている。

先端の龟头部は完全に脱皮していて、更に野太くカサも大きく開いており、肉茎はへそ近くまで長く高く反り返っていた。例えるならば、女を求めて猛り狂った雄牛の欲角である。色はまだ女を知らない明るい桃色をしているが、もし鍛え上げたならその雄々しすぎて遅しすぎる姿だけで、どんな高慢な女でも、ごめんなさいと平伏させてしまうだろう。

「すぐお立派……う☆☆」

ビクンッと蠢動する若角の姿に、女教師は頬を上気させて見惚れていた。

長袖ワンピースを着た可愛い少女の下半身から、太長い男根がそそり立っている。そんな少年の羞恥姿は、まるで清純な少女が内に秘める牡にも似た淫らな性癖を暴かれ、背德的に融合させられてしまったようにも見えて、女教師の背筋はイケナイ妄想でゾクゾクと震える。男の子も女の子も大好きな両刀女教師にすれば、まさしく神様の悪戯である。

「ふふふ……私がこんなにしちゃったのねえ……今すぐ責任取ってあげるわね」



そう言うとき美しい英語教師は、淫らな光を宿す瞳をしつとりと細め、少年の桃色ペニスにそつと掌を添える。掌全体の柔肉で堅い牡肉を包みながら、細い指先で肉角の根本を刺激する、逆手での男根摩擦。

「っ!?　せ、せんせ——あふ……うっ！」

「あん、女の子みたいに可愛い声……センセイ、コーンしちゃう」
しゅり……しゅり……しゅり……

決して握らず、フワフワの掌でヤンワリと熱肉が包まれる。ゆつくりとゆつくりと掌を上下されて、ジリジリと焦れたい刺激で若い性感が追い込まれてゆく。

「うう——うくふ……っ！　せんせ……はう——！」

女教師の淫らな温掌で、未経験な若男根はアツという間に射精の限界点にまで引き金を絞られてしまった。何かを堪えるように必死に目を閉じて、金魚のように口をパクパクさせている童貞少年。吹き出す汗で丸眼鏡が曇り、ペニスはギンギンと硬度を上げて、透明な先走り液がトロリとこぼれて女の掌を濡らす。

男根の熱さは女教師の掌を火傷させてしまいそうな程にまで、熱くなる。

「うっふふ……☆　いいのよ、センセイの掌にキモチよく出して。センセイもキミのいくところ、ゼヒ見たいの」

「せんせ——あひうう……っ！」

しゅり、ぬちゅり、しゅぶぬり。

掌の上下サスリが微妙に速められた。その速さは早すぎず遅すぎず。ペニスに刺激をする場合、遅い刺激だけだと焦らされてイケないが、早すぎても刺激が単調に感じられてしまい、逆にイケなかったりする。しかしイロイロな経験をしているらしい年上の女教師は、硬く^た起ち震える牡肉のあやし方を心得ているようだ。年若い少年は男根一本を刺激されただけで、声も出せない程全身が硬直させられてしまっていた。

「——っ!!」

(せ、センセイ……気持ち、いい……!!)

単人の心臓がドキドキと鼓動を速め、手足がカクカクと震え始める。男子生徒の変化を見て取った英語教師は興奮の汗を浮かせ、更に複雑な動きで男根を責め喜ばせ始めた。

片方の濡れ掌で肉傘裏と堅棒本体を逆手に包んで先端から根本まで摩擦をし、もう片方の掌では下から睾丸を持ち上げて袋の表面全体をユスモミとマッサージをする。

ペニス全体を女性の指でさすられて表面の神経がピリピリと痺れさせられ、揉まれる睾丸は女性の体温で暖められている。最も弱い部分を愛撫されているという優しい感覚に、理性が安堵で蕩かされて、更に性神経全体が射精に向かって熱を溜められてゆく。

「ア、アレ……全部が……包まれてえ——っ!」

「ああん、進崎くん……キミってホント、何て可愛いのかしら……うふん♥」

吐息が掛かり体温を感じる程の間近で、興奮に頬を染める大人の女性に見つめられながら、性器を弄ばれている。恥ずかしいのに、この快感をもっと味わいたいという思いと、早く射精したいという欲求が更に同時に強くなる。

ぬちゆしゆりしゆぷしゆり、もみぬゆり、くたヌる、ぷにり。

男の先走り液に濡れた女の柔掌が上下摩擦の速度を上げて、逆に睾丸マッサージは更に優しくゆつくりにされる。速くと遅くの二種愛撫に刺激をされて、隼人の射精欲はとうとう限界に追い詰められてしまった。

「ダウ——ダメですうつつ！ このままじゃ、もうっ——っ!!」

「うふふ、いいのよ……いいっばい出してえ☆」

ぬルちゆしゆしゆりゆヌちゆ、むにり、もみゆチュ、ぶぬゆヌり。

ペニスの感覚に神経が集中させられて聴覚が鈍り、音が聞きづらくされる。全ての指先からスウ……と熱感が失われてゆく中、少年の指先が必死に固い壁を掴む。

ペニスに更に硬度と太さと熱を上げた途端、女の掌で肉傘裏の弱い筋をスリリッツと刺激され、牡肉が限界を迎える——。

「あううつつ！ せつ先生つつ、ごめんなさ——はふああうつつ!!」

どブぶびユツつ、びゆクつびゆくクつつ。

隼人の若茎が大きく跳ねながら、熱い白樹液をビュプビュプと吐き出した。

ぷゅうウつつ、ぶビユツ、ぷびゅつつ、ドぷピユウつつ。

「ああん、進崎くんだったらこんなに出しちゃって……何て熱いのお♥」

有り余る力を見せつけるかのように、勢いよく吹き出される青い匂いの牡獣液。女の掌全体が年若い男の熱い精液にまみれて穢され、収まりきららない牡液は指の間や細い指を伝ってトロリと垂れ伸びるが、床に落ちない強い粘性を帯びている。

「先生の掌、たっぷり穢しちゃって……いけないコ☆」

いけないコ、などと言っていた女教師は嬉しそうに頬を染め、未だ吐き出され続ける少年の精液を、粘液熱い濡れ掌で受け留め続けていた。

「はあ、はあ……せ、先生……」

「うっふふ、イく顔も可愛いのねえ……これでスッキリして授業に臨めるでしょ？ 明日からもいっぱい、センセイが気持ちよくして・ア・ゲ・ル」

そう言っ流し目ウインクをしながら、担任英語教師は掌に吐き出された少年の精液を、熱っぽい吐息混じりで美味しそうにペロリと舐める。額にうっすらと汗を浮かせて、女教師の瞳は淫らに満足げだった――。

今朝から隼人に対する女の子たちのアプローチに変化が現れ出したのは、単なる偶然ではないだろう。昨日、ホームルーム前に成績のことと担任教師に呼び出された成績最下

女の子に服を脱がされる恥ずかしさに戸惑う思春期少年はしかし、手足を押さえる女体の感触がいつもと違うことに気がついた。いつもと比べて何だかフニフニと包まれるように柔らかくて、しかも確かに暖かい。

「あ——あれ……なんか、柔らかい……？」

「あは、触っただけでわかるんだ、スルドイね〜」

「でもでも、進崎くんのエッチ〜」

単人の困惑に女の子たちは答えてはくれず、逆にキャアキャアと喜ばしげである。そのままシャワー室に連れ込まれた混乱少年に、キャプテンが答えを教えてくれた。

「えへへ……進崎くん、ほら見てて」

湯気を立てて吹き出すシャワーを、少女はユニフォーム姿のまま頭から浴びる。汗を洗い落とす暖かい水流は、そのままユニフォームに吸われて濃紺色の布にゆっくりと浸透した。途端に肩から胸へ、肌張り付いた布が下の肌色を広く透けさせてゆく。そしてたっぷり湯を含んだユニフォームの豊かな胸部先端には、何と朱い乳首までもがうつすらと透けていた。

「キャッ、キャプテン、その姿は……っ!?」

全身を濡れさせてお湯を滴らせる、透けたバレーボールユニフォームの少女。濡れた体操着は恵まれた双乳の谷間にまでペタリと張り付き、豊かな柔肉山の肌色と曲線美を透

け見せつけながら、先端の媚突を浮き立たせている。

「練習用のユニフォームは試合用と同じデザインなんだけど、薄い生地で出来てるから透けちゃうの。どう、えっちでしょ？」

練習でよく破けたりするから、安く上げてたくさん作ってあるらしい。

透けた布地を引つ張りながら、女体の動きに合わせてタップユと揺れる濡れ巨乳は、少年の脳に焼き付いた女性肢体の柔らかさをエロティックに思い出させる。初めて見せられる官能的な濡れ女体の姿に視線は釘付けにされ、股間はアツという間に若い猛血を集めて硬化した。隼人の反応に頬染めて喜ぶ部員たちはみんなで交代しながらシャワーを浴びる。「わわっ、み、みんな……!!」

周りでは次々と濡れた少女たちのユニフォームが透け始めて、大小それぞれのバストや引き締まった背中が官能的に透けて、少年の視線を奪ってゆく。少女たちの濡れた柔バストで取り押さえられて身動きが取れず、視線のやり場に困って思わず下を向いた隼人に対し、僅かに頬を上気させながらキャプテンは新たな事実を打ち明けた。

ブルマの腰部両端を摘んでクイっと引つ張り上げると、股間の生地が女秘部に食い込みクッキリと縦線が現れる。

「今日キミが見に来てくれるから、みんなずっと下着は着けてなかったんだよ。透けたり食い込んだりするのって、キミが喜んでくれるかなって思ってたんだあ」

ハルカの誘惑に対する答えは、いきり立つ股間が証明している。周りの少女たちも見せつけるように、前から後ろからブルマを引き上げて肉筋を現す。赤色のブルマに浮き出た柔らかい肉の閉じ目に、隼人は思わずコクリと喉を鳴らしてしまった。

正直な反応を見せた下級生少年の前に跪く、濡れ透けたユニフォームのバレエボール少女。濡れ髪ハルカは目の前の熱い堅勃起をそっと引き寄せると、柔胸先端の朱い媚突で少年勃起の裏側をスリスリと擦り始める。

Tシャツよりも薄いサラサラした感触と、布越しに感じる硬化した乳首の堅さで、ペニスの弱点を微妙な刺激で擦られた。敏感な肉傘裏を細かく擦られると、亀頭部の裏から根本までの勃起内部が、くすぐつたいジレつたさに駆け抜けられる。

「あ…キ、キャプテン……っ！」

「あん…キミのつてば、堅くて熱くて……おっぱいが痺れちゃう」

濡れユニフォームの少女は透けた谷間に男肉を挟み込むと、ユタユタと布越しにパイズリを始める。

柔らかい布に暖かく包まれて、ムチムチと締め付けられる緩優しい感覚を勃起に味わわされていると、突然更衣室の入口がガラッと開けられる音がした。更にドスドスと強い足音が近づいてきたかと思うと、今度はシャワー室の扉がガチャッと乱暴に開かれる。

現れた人影に、心臓が飛び出すかと思われるほど驚かされる半裸下級生。

「——っっ!!」

光る眼鏡、尖った瞳、そして少年の目にははつきりと見える、天を突く角。そこに立っていたのは、鬼のように怒りを露わにした眼鏡の生徒会長、朝宮美月だった。

「……どうも朝から進崎くんの様子がおかしいと思って来てみたら……! ハルカつ、あなた一体何をやってるのっ!」

「みみっ、美月先輩っ……っ!!」

慌てた一年生とは対照的に、スポーツ少女は生徒会長の怒りを余裕のチラ見でかわす。

「ナニって当然、愛しい男の子にみんなでご奉仕しているのよ」

「いつ愛しいって……っ!」

「だって進崎くんは年頃の男の子だもん、一人の女の子とのエッチじゃ、きつと満足出来ないよ。たくさんの女の子といっっぱい、エッチしたいもんねえ」

「ええっ!? そ…そうなの、進崎くん……!」

奥手で真面目な眼鏡少女は親友の言葉を聞かされて、ショックを受けたようだ。

「あの……それは——うう……っ!」

半月のようなスルドイ視線で、驚きながらも問い質^たしてくる美月。しかし当の隼人は男根を擦られて性感に意識を阻害されてしまい、うまく答えることが出来ない。しかも少年のペニスは女肉に包まれ、まるで嬉しそうに力強くそそり立っているのである。真面目な

少女から見れば親友の言葉を証明しているようにしか見えないうらう。

一方で、自分のすることに男の子が感じてくれているという事実が嬉しいハルカたちは、美月に睨まれていても隼人への肉体奉仕を中断する意志は全くないようだ。

「私たちは独占欲の強い美月と違って、みんなで進崎くん喜んで貰いたいもん。えへへ……ペロ」

「ハっハルカ……っ！」

他人の性行為を初めて見せられた少女は、恥ずかしさに赤面してしまった。更にバレエ少女はまるで乱入生徒会長に見せつけるかのように、豊かな谷間から突き出された朱ペニスの艶亀頭を美味しそうにペロペロ舐める。周りの少女たちもそれぞれユニフォームを捲って、おっぱいを露出させたり片乳をこぼれさせたりと過激に隼人を誘惑してきた。

みんなで奉仕してあげたほうが、男の子は喜ぶ。そしてそれを、自分以外の大勢の女の子たちが、してあげている。そんなあからさまな挑発に、眼鏡少女の負けん気はポっつと火を点けられてしまったようだ。真面目少女は覚悟を決めた。

「——っそんなこと、私だ……っ!!」

負けず嫌いの真面目少女は少年に背中を向けると、なにやらモゾモゾと制服を弄り出す。白い何かを脱衣カゴに隠してこちらを振り向くとシャワーの下へと歩み寄る。

「進崎くん……私を見て……！」

美月は隼人に背を向けたまま、みんなと同じく暖かい湯で全身を濡れさせた。

制服の薄い純白ブラウスがお湯を吸って肌に張り付くと、白い布は途端に肌色を透き通らせて、少女の細い背中にペッターと張り付く。そして濡れ透けたブラウスの背中一面には、肌色以外の色は一切見られなかった。

(み、美月先輩が……生徒会長が……まさか、みんなの前で……下着を……!?)

恥ずかしげに振り向いた少女の制服はしつとりと湯に濡れて胸に張り付き、胸の先端には桃色の媚突まではつきりと透け浮かしている。負けん気の強い眼鏡少女は制服から下着だけを脱いで脱衣カゴに置いて、自らも濡れた制服に肢体を透けさせた姿となったのだ。

「私だって、キミに喜んで欲しいもの……!」

「先輩……」

濡れたブラウスを卵の薄皮のように纏わせて浮かぶ、薄桜色に染まった雪の白肌。ツンと上を向いて張りのある乳房を豊かに透けさせ少年に捧げ見せる、頬染める眼鏡の少女。

更にその場でクルリっと一回転をする生徒会長。その途端、濡れた髪と水分を吸ったスカートは遠心力で大きく広がる。そしてスカートが最も広がった瞬間、ショーツを失ったパツパツのお尻が、水分の艶を魅せながらチラリと覗けた。

更に回転に合わせて腰横の肌から脚の付け根、そして無毛の丘や柔媚肉の合わせ目が見えたりと見える。

(先輩が……制服姿でノーパン——っ!!)

素早い女体の回転であつても、少年の目は少女の秘処をはつきりと捕らえた。

ミスマツチなエロティックさを感じさせる才女の姿を見た途端、少年の勃起はドクンっと一回り太さを増す。その変化を谷間で感じた、胸奉仕のスポーツ少女。

「わあ、美月のエッチ姿を見たら、進崎くんのココがもっと元気になったね。あたし嫉妬しちゃうなあ……うふふ」

ハルカの言葉に周りの女子たちも頬を上気させてキャアキャアと歓声を上げる。隼人の反応を知った美月はトマトのように頬を真っ赤にして恥ずかしげに顔を逸らし、しかし湯に濡れて透けた胸を更に強調するように、両腕で双乳を、むにけり、と挟んで突き出した。左右から押されて縦に柔らかく変形する双つの柔乳はいつもよりも質量が増して、しかも上乳までも透けたブラウスに押しつけられている。愛しい少年の視線を感じてか、豊乳先端の桃色媚突はキュウ……と硬化してブラウスを押し、乳首と乳房の間に空気の入った白い輪の空間を演出した。

(美月先輩の濡れた姿……すぐくエッチだ……!)

頭から濡れた生徒会長は少年の足下にキャプテンと向かい合わせて跪くと、ブラウスのボタンを外して胸を露出させて、寄せるように両掌で抱え上げる。美月の考えを察したハルカが隼人のペニスを谷間から離すと、ユニフォームを捲り上げて豊かな双柔胸をタップン

つとこぼれさせた。

二人の少女は四つの合わせ乳房で、天を向く堅勃起をぶちゆり、と挟んだ。隼人から見て右側に美月が、左側にハルカが跪いている。

「み、美月先輩……」

「もう……キミって子は、しようがないんだから……」

年下の少年を責めるような、しかしどこか艶を含んだ、複雑な瞳で一年生を見上げる眼鏡の黒髪上級生。愛しい先輩の献身的な奉仕に、隼人の心は感動でググッと熱くなった。

そしてボーイッシュな体育会系のキャプテンと知的な眼鏡の生徒会長、違う魅力に溢れた二人の先輩少女に見上げられながら胸奉仕をされる若肉堅棒は、二人同時での胸奉仕というセクシーな行為にドクンッと素直な喜びで熱血を集める。

（ハルカキャプテンと、美月先輩が……二人で、僕に……っ!!）

ショートカットの濡れたキャプテンは、手元に置いてあったポンプ式のボディソープを手にとると、若角に向かってピュ〜と液体を発射。ヌルヌルと暖かい石鹸液が、一つのパニスと四つの乳房の間にトロリと流れ込んでくる。

「進崎くん、あたしたちの胸でいっぱい気持ちよくなってね、そ〜れ」

元気少女の合図で、二人の先輩による合同柔乳奉仕が開始された。美月とハルカが一緒になって、ムチュルチュとバスタを上下に揺すって少年勃起を擦り立てる。

むにゅつるにゅるつぬるんつつるりゅつ！

「あつっ——せ、先輩……っ！」

四つの暖かい柔胸媚肉に左右から挟まれ、ペニス全体を根本から先端まで上下いっぱい押し締められて、さすり上げられる。硬化して粒立った乳輪の小さなツプツプで熱肉を包まれて所々を微細に刺激されると、勃起の表面から内部を通って下腹部の奥にまで小さな甘電に突き抜けてゆく。

少年の堅牡性器は射精に向かって更に硬度を増して、乳房の奉仕によって与えられる柔らかい圧迫快感を思う存分堪能する。敏感になってゆくペニスに隼人の思考は益々遮断されて、身体も力んで動けなくなる。

「……き、気持ち……いい——です……っ！」

「あは……進崎くん、嬉しいな……」

「……うん……私も、なぜだか……気持ちいいの……」

官能に苦悶する年下少年の顔を、愛おしげに見上げる美月とハルカ。自分たちの身体で少年に喜んで貰うという、女性本能とお姉さん本能を同時に刺激された二人は、もっと喜んで貰いたいという奉仕の心が更に強く湧き起こった。

「ね、美月……おっぱい同士摺り合わせて、進崎くんに見て貰おうよ」

「わ、わかったわ……進崎くん——んん……喜んで、もらえるのなら……っ！」

亀頭部で泡立つ石鹼を唾液だけで綺麗に洗い流すと、二人はツルツルの先端熱肉に舌を這わせ、更にペニスを挟んで硬化したお互いの乳首をヌルクリと擦り合わせ始める。

「ひゃうっ——そ、そんなに……：されたら——っっ！」

「あん、あたしと美月の乳首も……：レロ」

「擦れて——んちゅ……：恥ずかしいのに……：ちゅ」

又るチュルつくちっぺるっふるチュツっ！

新たな刺激でこぼれ出した先走り液を躊躇をせずに舌で舐め取る、親友同士の美月とハルカ。二人の濡れた舌それぞれに、先端や肉傘裏などをペチヨペロと別々に刺激され、暖かい乳房に左右からヌルキュウつと締め付けられる。柔らかい身体で奉仕をする上級生二人も、胸に感じる男性の熱さや存在感、更にお互いの媚突摩擦によって全身の性神経を甘く痺れさせられてゆく。瞳が濡れ蕩け、眉根もクタリと切なげに下がる。

一人の少年に胸肉奉仕をする二人の少女の悩乱姿に刺激をされて、乳房で隼人を押さええるバレー部員たちも新たな肉体奉仕を始めた。

「先輩たちスゴイ……：わ、私たちも……：！」

少女たちはそれぞれ自分の身体にボディーツープを噴射すると、隼人の身体に自ら肢体を密着させてヌリヌルと擦り合わせてきた。

「！……：み、みんなの肌……：ひう——っ、柔らかい……：っっ！」

上腕を柔乳に揉まれ、下腕を双乳に挟まれ、掌に微乳が乗っている。背中を四つの柔乳で、胸は左右からのプル乳で、お尻を左右それぞれ大小の媚乳肉で、腿やスネまで部員たちのおっぱいで、暖かくて柔らかい少女たちの身体マッサージで擦り上げられる。

ペチよるっふる又つぬるりゅっレチュウちゅっ！

全身を柔媚肉で包まれて、更にペニスをキュウキュウと締め付けられて、先端部をペロペチュと舌愛撫をされる。力んだ身体が更に硬化して熱を上げて、全身の神経が女の子特有な熱柔媚肉の甘い刺激だけに占拠される。隼人の反応を感じた奉仕の少女たちは更に満足して貰おうと、全身媚奉仕の密着度と速度を上げてきた。

ぬルペつよつルちゅルプつブルムゅつちぶぬるちゅっ！

首から下を余すところなく柔女体に押し包まれて、少年の性感は急激に高められる。強い甘刺激に手足が痙攣し身体中の熱感が下半身へと集まり、更にペニス全体へと貯め込まれてゆく。耳がツンと遠くなり、全身の感覚が射精に向かつてただ爆進する。

「あああんっつ、進崎くんとおっ：一緒にイけそう——はふっ：だようっつ！」

「わ、私もお——んくううっつ、はああっ：：：：いつ、いつ：：：：ちやううっつ！」

左右から堅勃起を挟む巨乳と豊乳をムリユプニとこね合わせて、二人は蕩けた瞳で快感を告げる。射精欲に責められる愛しい少年の顔を見上げた二人の上級生は、自然と息を合わせて射精への引き金を引いていた。美月が男性器先端の肉割れを、ハルカが肉傘裏側の



敏感な細筋を、濡れた熱い舌で同時にペチヨソリつつと刺激をする。

「——!!」

その姿はまるで、二人の少女がペニスを挟んでキスをするかのようだ。視覚からの刺激と亀頭部への刺激で、少年の男肉は一気に性感の限界点を突破させられてしまった。

少女たちの乳愛撫を全身に感じ、二人のキスフェラで勃起の弱点二カ所に同時決定打を受け、隼人の全身が感覚を失い、脳裏が真っ白に包まれる。そして——。

「ひゃううっ——せ、先輩っ、キャプテンっ……みんなあ——つつ!!」

ぶシュぶうう、プブッドぶブゆぶブっ!

びゅぶジュぶプとぶんつつびゅウぶぶつつ!

少年の腰が跳ね、若勃起から天に向かって、大量の白精液が噴き上げられた。

「あん……進崎くんったらあ、こんなにいっぱい……」

「……隼人くん……また眼鏡、穢されちゃう……」

粘性の高い少年の射精液が空中でネットネットと散りながら、少女たちの愛顔を淫らに穢してゆく。美月もハルカも、恍惚とした表情で自ら桜色の唇を開いて濡れた舌を差し出して、降りかけられる隼人の白粘液を受け止める。

ポタ、ポタパタ!

スポーツ少女のショートカットの髪に、凜々しい眉に、豊かに双乳に、男液がネットリ

と張り付く。

ポタリ、パタトロロ……!

生徒会長少女の黒髪が、知的な眼鏡が、プルンとした唇が、少年の性欲粘液で穢され白く染められる——。

「はあ……はあ……あ……二人とも……」

艶を含んだ瞳で少年を見上げた二人の少女は見せつけるように、顔に掛けられた精液をお互いの舌で舐めあい始める。その姿はまるで、エッチな子猫が官能的にジャレあうように見えた。ショートカットのスポーツ少女と、サラサラポニーテールの眼鏡っ娘生徒会長。対照的な二人の思わぬ媚態に、息つく隼人のペニス再び先走り液を滲み出し始める。

「ああん……進崎くんのココ、もつとエッチしたい……って言ってるよ……」

「……もう……ホントに男の子って、欲張りなのね……」

「やつぱりみんなでお相手してあげなくちゃ、ダメですよね」

そう言って勃起男子を見つめる少女たちの表情は、目の前でそり立つ勃起肉を胎内に埋められるという淫らな期待で、艶やかな羞恥の笑みを浮かせていた——。

そしてその夜、隼人の部屋には理事長からの新たな催促が届いていた。それは残留する部活を決める期日まで、あと一週間だという報せだった——。

「ひゃっ——あああ——っ、そっ、そこはああ……っっ！」

ローションか蜜液か、既に熱を持った肛門はちよつと力を入れただけで少年の指をツプリと受け入れた。敏感なお尻を指で擦られて腰の力が抜けたのか、桜子は前屈みになって両腕だけで上体を支えている。

浅く少し出し入れをしてみると濡れた媚肛はキュウキュウと締まり、後口の動きに合わせて掌の秘唇もクチクチと収縮して掌に吸い付く。掌は新たな蜜で溢れて濡れる。

単人が右手の手遊びに気を取られていると左手では新たな動きが見られた。ベッドの軋む音に振り向くと、タンクトップを脱いだスポーツ少女が更にショーツから片足を抜いている場面だった。

「あたしは左手でっ……あん、コッチを見てるの、エッチ☆」

恥ずかしそうに舌出しをくれると、キャプテンの少女は何とお尻を向けて、大の字少年の左腕を跨ぐ。大きく脚が開け広げられた瞬間、左胸のすぐ近くで朱い秘唇がクチュリと秘花を開いた。

(ハ、ハルカキャプテン……すごい格好……！)

単人の左腕を抱きしめて、身体前面をピタリと腕にくっつけて伏せる少女の姿勢は、こちらの顔のすぐ近くでお尻を向けて、ヒザを抱くように秘処を上腕に密着させている状態である。

少年の肌の感触にヒクつく膣口や、一緒に窄まる菊肛の動きも、二十センチも離れていない間近で見えているのだ。濡れた薄い肉壁や小さくて複雑なシワも、熱が伝わってくる程にはつきりと細部まで観察出来る。濡れた秘処を押し充てられた上腕も、こぼれる恥蜜と熱を受けて暖かく濡らされた。

「あたし、おっぱいで挟むの、好きかも……あむ……」

全身で左腕に抱きついたスポーツ少女は巨乳で下腕を挟みながら、下級生男子の左手の中指と薬指を口に含む。甘噛みしたり指を入れ替えたりしながら、鍛えられて引き締まった身体をくねらせて、胸と秘処を擦りつけて少年の左腕で性快感を貪る。

(う…腕を抱きしめられるのって…気持ちよくなって、なんか幸せ……)

腕全体に女体の優しい圧力を感じると、頼られて嬉しい男の本能までもが刺激された。

「あん……みんなエッチねえ、うふ☆☆」

頭の上から天上先生の熱っぽい笑みが聞こえる。少年の頭を支えてオデコにチュッとキスをする、はだけたネグリジエを捲り上げてヒザ立ちになる。脚を開いてそのまま前進をすると、隼人のすぐ目の前には担任女教師の濡れた秘処が捧げられた。

たっぷりと果蜜を含んだ大人の牝花は朱く充血していて、男性に触れられる期待にヒクヒクと息づいている。カフェオレ色の肛門も視線を物理的に感じるのか、時々痙攣するようムキユウつと窄まる。大人の女性ならではの、淫らに成熟して男性の本能を刺激する

淫猥粘膜。スケスケ女教師はゆっくりと腰を降ろして、濡れた秘唇を男子生徒に近づける。

「先生にもキミの舌、教えて欲しいの……♥」

「はい：ペロ」

鼻先に触れる程まで腰を降ろされると、甘い恥蜜の香りと朱い秘唇の熱が顔全体にまで感じられた。少年は自然に、目の前で誘う女の蜜華に舌を這わせる。

ネットリと熱い、極柔らかいゼリーのような女性器に尖らせた舌を差し込むと、顔面騎乗の英語教師はプルプルと身体を震わせて、艶秘処からはトプッと蜜液を溢れさせた。

「ああん：進崎くんの舌がヌルヌル動いて——ふうんっっ……アソコが溶けちゃいそうよおっ☆」

ぷちゅりと顔面に女性器を充てられた少年は、包皮から剥き出た堅い肉芽から膣口までを、堅い舌先で何度も何度も往復をして濡れた媚唇を唇で啄む。女唇の熱で眼鏡が曇り、溢れる愛液がレンズに垂れて視界が塞がれても、男の本能は舌で女性器を捕らえ、舐めて吸った。果蜜と混ざった唾液が、トロテロと溢れて頬を垂れる。

つゆじゅる、チウウ：ペロちゅく、ズちくゆつうっちゅとろり…。

「先生の——ぷちや、チュっ……どんだん、くちゅる——溢れてきます……ちゅうう」

「だつてえ——あふっ、進崎くん……上手、なんだもん——ふひゃんっ！」

芳醇なヨーグルトにも似た大人の恥蜜を、隼人は顔全体で味わう。男子生徒に愛撫され

る興奮で、担任女教師は自らの爆乳をモミ上げ始めた。

「わあ、進崎くん、先生のを舐めてるう」

「え…えっちです…」

「もう…隼人くんた——ら、はああ…っ！」

大の字で仰向けにされている少年の身体の各所で、頂点に向かって汗を浮かせる女たちの快楽奉仕が加速される。全身を女性の暖かい柔媚肉で責められる隼人の身体は、快楽を得て射精に向かって力を込められ、堅くなつてゆく。

ムニユたぷっぺちよ、ヌト、ぶちユリッチュうつぶちゅくぱっ！

ペチよっれ口ちゅりっぷりゅっしゅぶるりゅつぬるちゅルつとるぬる…！

「んぺちゅ——キミの、腕え…：…あうんっ——胸に擦れていいよおっ！」

左腕を巨乳奉仕しながら指をペチャプチュとしやぶるパレー部キャブテンが、薄い恥毛を擦らせながら全身をくねらせ、快感を得る。

「お、お尻が…：…あなたの指で、犯していただいて——っひゃふうっっ！」

右掌で濡れた秘処を包まれて媚尻をツブツブと指姦される茶道部部长は、完全に脱力してしまった身体を隼人の腕にクツタリと預けながら、お尻の快感にピクピクと身体を震わせて味わっている。

「溶けちゃいそうっ——先生、進崎くんの舌で——あはあっ…：…身体が溶けちゃううっ！」

両掌で爆乳をコネ上げ乳首を転がし、秘唇を啄まれる快感に天を仰いで震えている担任
女英語教師。

「お腹の中：あああつ！ 隼人くんに、満たされてえつ——あくふうつつ！」
前後運動から更に上下抽送運動を加え始めた眼鏡の才女は、年下少年の腰に両掌を突いて、苦しげな悦顔の中にも蕩けた微笑みを浮かべていた。

ずちゅぷっぺちゅぶぢゅーつぎゅぶちゅうつつ！

スリゅつくちりったぶぶるグちゅっプつズちゅぷくぶちゅルつつ！

トロトロと愛液を受ける右掌が、暖かい快感で熱感を失ってゆき、鍛えられた女肉に抱かれる左腕が性神経を甘く焼かれて、ぶるぶると痙攣を始める。溢れる果蜜を纏わせた舌は熱い女唇を味わい続け、更に熱と香りに脳裏を占められ、思考が遮断される。

抜かれる時には曲壁で肉傘裏を締め擦られ、押し込まれる時にはツブツブで弱点を擦り責められて、ペニスは射精に向かって確実に熱と太さと堅さを増大させてゆく。

(かっ身体中で——いきそう……!!)

少年の肉体を愛撫する女性たちも、身体で感じている男熱と男肌の刺激に性感が高められて、皆蕩けた瞳で肢体奉仕を続ける。

ヌるつぬるツちゅつつるユつぶルゅつとプつゆクつつ!!

「センセイ——はああんっ…進崎くんのっ舌でいきそううつつ！」

「私のお尻、恥ずかしいところが——あんっ……あなたの方に、擦られてえ……っ！」
 彼女たちの熱く激しい桃色の吐息で隼人の脳裏が埋め尽くされる。手足の力みが限界に達し、腰の奥深くに溜められた快感の砲弾が、射出に向かって絞りを詰められてゆく。

全身奉仕をする彼女たちの身体が熱を帯びて、一気に桜色へと染まっていった。

セクシーな女教師が激しく腰を震わせながら、抱き上げた爆乳を揉み弧ね舐めて、快楽を貪る。後輩男子を胸と舌で弄ぶバレエ部キャプテンも、快感の頂点に向かって柔巨乳と濡れた恥丘を男性の肌を擦りつける。指肛虐の快感に上体を倒して蕩ける襦袢少女は、出入りする指に合わせて身体を前後に揺らし、ひくつく媚唇を少年の掌にクチュキュプと押しつける。

そして愛しい少年と一つになった生徒会長は蕩けた瞳を一切逸らすことなく、双つの豊胸を揺らし密着する腰をくねらせて、感じている喜びと性快楽の全てを隼人に伝えた。

「はっ——隼人くん……満たされてえっ——あふは……気持ちいいの……っ！」

「胸、むねえっ、気持ちよくてだめえっっ！」

左腕が、右腕が、顔面が、ペニスが、女性たちの渾身の力で、ギユウウっつといっぺんに抱きしめられる。

じゅぷううっちゆくプッ、づゅぷちくギゅぷうううっつ!!

「ぼっ僕もうう——っっ！」

その瞬間、隼人の脳裏は白く発光し、少年勃起の奥深くから先端に向かって、突き抜けるような射精快感に駆け抜けた。

「——っっ！ イっイクうっっ!!」

っっどプビゅぷっビユびゅブクくプっ！

ぶしゅビユウウウっっどぶっどぶぶプううっびくぶつとぶピユくううッっ！

「せっ先生もおっっ——イっちやううううっっ!!」

「胸っあたしも胸でええっ——ひゃはあああっっ!!」

「お尻蕩けっ——っ溶けてしまいますううっっ!!」

「はっ、隼人くうんっっ——あくっはううっっ……あなたが好きいいいっっ!!」

年下の少年を囲む女性たちが、一斉に性快楽の頂点を迎える。女教師の脂の乗った両脚に頭を締められ、性の頂点で背筋を仰げ反らせた和装少女の熱い秘処に掌を押し潰され、左手を抱きしめるスポーツ少女に腕全体を柔肉で圧迫されて、結合している生徒会長にはきつい膈壁でペニスを締め付けられながら、隙間なく腰が密着される。

女性たちに全身を抱きしめられながら、尚も勃起の根本から先端に向かって射精を促されるようにムチュムニと締め付けられて、更にビユビユプと射精をした。

ベッドの上の全員が背筋を反らして硬直し、数瞬の後にクッタリと脱力をする。

「はあ……はあ……」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>